

汲古一瞥

「占卜と万葉の歌」

中村素堂

一
国木田独歩の『武蔵野』の中に、二またの道へ出て、どっちへ行つたらよいかと迷う時にはステッキを立てて、その倒れた方へ行けばよいと書いてある。

また谷崎潤一郎の『盲目物語』の中に、柴田勝家の出陣の時にその乗馬が嘶いたので、これは敗戦の兆しだといって、みな顔色が変わったといっている。

そんなことでなくてもわれわれが日常生活の中で、昨夜、金魚の夢を見たけれどどうかしらとか、出がけに下駄の鼻緒が切れたから何とか。あるいは街頭で宝くじを買う人を見ていると結構迷つていくとか。

人間はどうも迷いの動物のようにいう仏教家の説が本当なのかも知れないが、とにかく一々ものを理論的に割り切つて暮らしきれないものらしい。これは洋の東西、むかし今に関係しないくらいである。外国にも随分ランプや何かの占いがあるようである。中国の明の沈周という精神家でもまた芸術家であった男は、その有名な作『安居歌』の中で、「卜に問わず」といつているが、これは自分の行動について他に聴いてみるような自信のないことではいけない、というような意味であろう。

が、しかし中国には非常に占卜に関する否定、肯定の言葉があるのは、中国人は占卜が好きで、それに関する利害の多いせいかも知れない。人生は結局、ひとつの賭ごとみたいなものだという説もあつて、人間は自分の一生さえ判断定めがたいのだから、みずから自分の行動を律するより、人間外の大きな力のある支配を占つてみた方がよいという意見も出てくるのである。

しかしやはり文化の進展は、ついつい天運支配という觀念から離れて、古代人よりは占卜に対する信仰の減つていることも事実である。ただ今日でもいわゆる思案の外となると、すぐに占卜に走つた

り、新興宗教に走つたりしていることは、ふと街の灯の片すみに見える易者の店に、最も近代的風姿の男女が真面目になつて、その卜筮をやつてもらつてゐるのでもわかる。

これが短歌の世界に持ち込まれて、実にさまざまな雑占と、人間の愛怨やいろいろの事件とからんで、おもしろい姿を映し出してゐる。そしてそれが断然『万葉集』に多いのも、やはり上代人に占卜思想が濃厚であつた証拠と見てよいと思う。もつとも中国の古い帝室と同じように、上代の日本は国家の大事を占卜によつて判断したことは事実で、陰陽博士、陰陽寮というような制度があつたこと、また今でも大嘗祭の祭田など、龜卜という方法で占つて定めてゐるのだから、その時代の人々が個人の大事や秘めごとを占いに問うのも自然の社会相といつてよいであろう。

西村博士は、正占、雑占と二通りに分類して、民族的なものが正占で、個人的なものが雑占としてゐるが、その手段から見れば、かにこのように分けられると思う。すなわち亀甲獸骨を焼いて占うことは、手法から見てもなかなか簡易なものではない。鹿の肩甲骨を焼いて占うといつても、その鹿を捕獲してかからねばならない。ただ今日占うという言葉がこの鹿を呼ぶツングース語の「ウラ」から来ていることは、意味深いものを感じる。この鹿に代わるに亀甲を用いて、後代にはそれが正法となつたといわれている。

これに比べると、雑占は全く雑占で、実に無限にあるともいえるくらいである。個人個人にさへ、ある占いを持つてゐることが少なくないほどで、その中で多く用いられたものがまた時代によつて変遷したり、亡びたりしてゐるのである。いま『万葉集』に載せられてゐる歌の中の雑占でも約七、八種はある。どんな方法で行われたものか、ほとんど見当のつかないものもあるが、また今日でも簡易占卜としてやりそうなものもある。

これらの歌を読んでいて心うたれるのは、その作者が、いかにもその占いに頼つてゐて、大いなる神の力をのぞくもののように歌いあげてゐることである。(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〔たかむら〕昭和五十七年